

かささぎ

通信 第95号

毎月第2金曜日 13:30~15:30

2020年 9月 11日 発行

刈谷市中央図書館研修室 参加自由

森三郎刈谷市民の会「森三郎の作品を読む会」

二〇二〇年七月の「森三郎の作品を読む会」では
『森三郎童話選集夜長物語』（1996年、刈谷市教育委員会）
所収の「あのころ」「西瓜」を読みました。

「あのころ」（初出『赤い鳥』一九三三年六月号、筆名北村よし）は小学校五年生の女の子の話です。主人公は東京からの転校生に憧れを抱いていたのに、転校生は学級の中の勢力の強いグループにすぐに仲間に入れられてしまつて、結局友達になれなかつたいきさつが描かれています。そのグループは町長さんの子やお医者さんの子で、転校生のお父さんも水力発電所の技師という安定した仕事でした。一方主人公の女の子の家は、町でも指折りの造り酒屋だったのが、事業の失敗から破産し、主人公は小学校を卒業すると元の家の近くの男仕立屋へ裁縫の稽古に通うことになりました。女学校へ通う転校生たちのグループと顔を合わせても黙ってお辞儀をするだけだったというのです。

森三郎は小学校五年生の頃の女の子の日常を描いていますが、子どもの世界が大人の社会の縮図になっていることを示唆しているように思われます。「あのころ」という題名に、「五年生の頃」という意味と、主人公の家のシンボルツリーの「椿の花がぼたぼた落ちる頃」の苦い思い出という意味を重ねた印象的な結末になっています。

前回「あのころ」を読んだ時の様子は「かささぎ通信」第31号で報告しましたが、今回は転校生にまつわる思い出や、主人公が「あだ名」で呼ばれて嫌な思いをしたことに関連して「あだ名」の問題など、様々な感想が出ました。何回読んでも違う発見があること、読む人によって視点が変わることを改めて感じました。『赤い鳥』の時代の読者にとっても同じだったでしょう。森三郎の童話を読む今の子どもたちにも沢山の発見をしてもらいたいと思います。

「西瓜」（初出『赤い鳥』一九三三年九月号、筆名早川七郎）は、四年生の二人の男の子の話です。二人は、学校の裏の日傭とりのお島ばあさんが盟の中に冷やしておいた西瓜でボール遊びをしているうちに、西瓜を落としてしまいました。くすくす笑いながら始めたけれど、受け止められなかった西瓜が地面に落ちて真つ二つに割れてしまふと、そこで事の重大さに気づきます。どんなに悔いても西瓜は元に戻りません。この後の二人の葛藤を作者は仔細に描いています。読み終えて「二人がもう二度とこないはずをしないと心に誓う様子がよく出ている」「子どもはこのような経験からいたずらの限度を学ぶのだろう」などの感想が出ました。同年齢の子どもたちが読んだ時には、作中人物とドキドキ感を共有することだろうと思います。一九三三年になると、『赤い鳥』には鈴木三重吉から現実的な真実味のある作品の要望が出ています。「西瓜」は子どもの心理を描いた現実的な作品と言つてよいと思います。

いたずらをした後、神妙に教室の席に座っていると、黒板の上の額縁が主人公の目に入ります。「我々は日本人なり。向上を旨とすべし。自重を体すべし。協同を重んずべし。」という教訓が書かれています。「かささぎ通信」第35号で紹介しましたが、この教訓は森三郎の出身校の亀城尋常高等小学校の校訓です。またお島ばあさんが草刈に歩いていくのも、学校の裏山の「お城山」の方向です。「お城山」は昔の藩校址に建っていた亀城尋常高等小学校から見えた小高い丘の呼び名でした。三郎は自分の子ども時代を思い起こしながら、「西瓜」という童話を書いていたのだろうと分かります。

西瓜を盟に入れて冷やす様子も隔世の感があります。三郎の家では、西瓜を井戸で冷やしたそうです。ある時冷やしていた西瓜の網が切れて落ちてしまったので籠に紐をつけて井戸の中に入れ、苦勞して引き上げた話を、兄の森銑三が書いています。（『森銑三著作集 続編 第十四巻 p.239』）

次回「森三郎の作品を読む会」の作品（十月九日実施予定）

「笛」（『森三郎童話選集 夜長物語』所収）